



一緒に、未来を、つくろう。

VISION

OF THE ISLANDS IN AICHI

佐久島・日間賀島・篠島



はじめに

あいちの離島〈佐久島・日間賀島・篠島〉の3島には、

さまざまな人々を歓ばせることのできる、いろいろな魅力があります。

ひとたび船に乗って海を渡り、この島でひととき過ごせば、五感で感じられるもの。

それは、カラダとココロに染みる、うれしい体験だと思います。

そんな喜びをもっとたくさんの人に知ってもらい、もっとじっくり味わってもらいたい。

さらに、期待を超えるよう魅力を磨いていくことで、かけがえのない存在になりたいと考えています。

この《ビジョンブック》には、来ていただけるみなさまとお迎えする島民が

一緒になって実現していきたい未来を描いています。

3島の誇りとあらたなる決意をじっくり噛みしめて読んでください。

VISION OF THE ISLANDS IN AICHI

- 01 はじめに
- 03 日本は、美しき島国です
- 05 あいちの離島ビジョン
- 07 3島の個性
- 09 佐久島のありたい姿
- 13 日間賀島のありたい姿
- 17 篠島のありたい姿
- 21 おわりに



日本は、美しき島国です。

日本の文化は、四方を海に囲まれているという地理的条件によって育まれてきました。
四季の移ろいや風・雨・霧・霞などのさまざまな表情をみせる天候が、
日本人の自然に対する繊細な感受性を磨き上げ、
地震や台風などの自然から身を守る団結力や助け合いが、
日本人ならではの強い絆を築いてきました。
それはなにより、海という隔たりに守られ、育まれた文化なのではないでしょうか。
島国だからこそ、その美しい精神や文化は守られ、そして純粋なままに受け継がれてきたのでしょう。

うれしいニッポンを育みつづける、 あいちの離島へ。

おいしい海の恵みがある。懐かしい自然がある。尊い歴史文化がある。心通うおもてなしがある。

日本のまんなかの小さな島々には、あたりまえの、でも忘れかけていた日本がありました。

それは、古き良きものが残っているだけでなく、

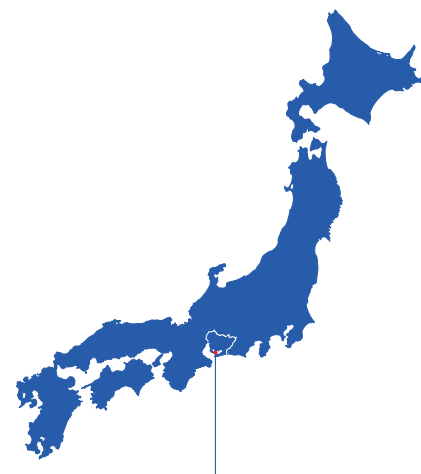
いにしえから培われた暮らしが今に息づいている、うれしいニッポンです。

だから、懐かしいけど、なんだか新しい。気づきがあり、感動がある。

知多半島と渥美半島に囲まれた豊かな海・三河湾に浮かぶ、

あいちの離島〈佐久島・日間賀島・篠島〉は、お互いが持ち得る個性を存分に発揮し、

うれしいニッポンを大切に育んでいきます。ぜひ、お気軽に、逢いに来てください。



たった数十分の船に乗れば、
うれしいニッポンに出会える。

あいちの離島へようこそ。



あいちの離島

佐久島 日陽旗 縁鳥

個性豊かな3島には、大切なニッポンがありました。



自然と人間がコラボレーションする、

佐久島



絆が深くなる、気の置けないおも

海に抱かれた豊かな自然。一緒に生きる人への心配りが育む絆。いにしえから培われた歴史・文化。
あいちの離島〈佐久島・日間賀島・篠島〉の3島には、ほど近いところにあるのに、異なる個性があります。
それは、忘れかけてしまいがちな、でもわたしたち日本人のころにある大切なものかもしれません。



てなし、日間賀島



天照大御神と海の幸で結ばれた、

篠島



佐久島

自然と人間のいい関係へ。

降り立てば、まわりはぜんぶ、海。寄せては引く波音に、海鳥の鳴き声に、頬をなでる潮風に。今自分が、島にいることを実感させられるでしょう。でも自然は、優しいだけではなく、ときに厳しい。ここには、そんな自然と共に生きる、遅しく、大らかな人のくらしがあります。広がる景色に、漂う空気に、流れる時間に、感じてください。それは、ずっと育み続けている、自然と人間のいい関係です。佐久島の自然に溶け込みに来てください。あなたの心を癒やしてくれるはず。



どうして、懐かしいカンジがするのか、 明確にはわからないのだが。

西尾市の一色港渡船場から、わずか20分。船旅気分もそこに降り立った佐久島西港は、島を去る船の発動機音とトンビの鳴き声しかない、いや耳を澄ませば、風の音をも聞こえる静かな港だ。今朝出発した名古屋市内とは、あまりにかけ離れた風情に距離や時間より遠くに来た気がした。

港からほど近い、黒壁の集落の路地を歩く。「三河湾の黒真珠」と呼ばれている家並みだ。車など通れそうもない細道は、迷路のように複雑に入り組んでいる。でも今日は、旅なのだ。時間はたっぷりある。迷ってみよう。気の向くまま、右へ左へ歩いていると、時々、猫に逢う。のんびりひなたぼっこ、か。海の町に猫は似合う。縦横に入り組んだ家並みは、潮風を防ぐためでもあるらしい。なるほど、猫にも居心地のいい場所なのだろう。光沢のある黒壁も、潮風から建物を守るため、かつて船底の防水に使っていたコールターールを塗っていたなごり。海運で栄えたこの島ならではの工夫だ。なにより、それがいまなお続いていることが素晴らしい。

しばらく歩みを進めると、土の道になる。柔らかなその感触に、アスファルトに慣れてきた自分に気づく。昔はこうだったのだろう。道の脇に目をやると、水仙が咲いている。香りもただよってくる。

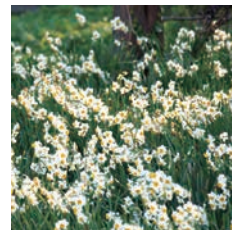
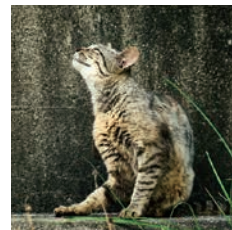
(32歳 名古屋市 商社勤務 男性) 代休の男一人旅

自生だ。花壇で見るとはちょっと違う。なんだかうれしい。

畑で農作業をしていた老夫婦に、神社への道を尋ねた。手を止め、歩み寄って、丁寧に、「今はちょうど、参道の山茶花が綺麗だよ」と教えてくれた。言われたとおり、しばらく歩くと、道が赤く染まっていた。美しい。山茶花の絨毯が敷かれていた。

蔦と藪に囲まれた古民家に看板を見つけた。カフェのようだ。時計を見れば、もう3時間も歩いていたことに驚く。文字どおり、道草が過ぎた。ひと休みできるかなと、おそろおそろ覗いたら、「いらっしゃいませ」と明るい声。その笑顔に誘われて、お店に入って、この島の野菜でつくったおやつをいただいた。聞けば、ご自分で育てているという。素朴な味わい。うん、なんだか懐かしい。この島が大好きだから、この島で採れる作物を使って、この島らしいおもてなしをして差しあげよう、そんな心意気が伝わってくる。

店を出ると、もう陽が傾きかけていた。帰りの船の時間が近いことを恨む。もうちょっとここにいたい。後ろ髪引かれるような気持ちとはこういうことか。ここでは、歩けば何かに出逢える。いや、正確に言うと、それははじめてのものではなくて、なんだか懐かしいもののような気がする。なぜかはわからないけど。



アートが自然の 素晴らしさを教えてくれた。

アートの島。このごろよくテレビ番組や雑誌で取り上げられる佐久島のことだ。信号機もコンビニもない小さな島で、何でまた、アート？と思うが、ま、なんだか面白そうだし、とにかく一度行ってみよう、と。わたしは、この春入学した大学で知り合った友人を誘ってみることにした。彼女はカメラ好きだというし、こういうちょっとした冒険、きつとハマると思うし。

海は凧いでいるけれど、潮風はけっこう強く、私は帽子を深くかぶり直す。ゆるやかな海辺をそぞろ歩き、きつと夏は海水浴でにぎわうんだろうなと思っていたら、いた！風を知らせてくれるカモメたちの群れ「カモメの駐車場」だ。一斉にこちらを向いて、次の瞬間にはまた一斉に向きを変えて…あ、このカモメさんたち、オブジェですから！！さらに歩を進め、石垣と書いて「しがけ」海岸へ。私たちは、ニッと顔を見合わせると「おひるねハウス」に駆けだした。ここで、寝転んでぼ～っとする、これ本日の一番のお楽しみでもあり。高い最上段に友人が、九つのうちの真ん中の空間にわたしが陣どって、しばし無言で海を眺めた。きらきら金色に光る海。きらきら、きらきら…これだけで、いいな。何だかそう思った。ただここにいるだけで、わたしはすこやかに空っぽになれた気がした。

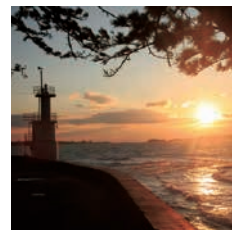
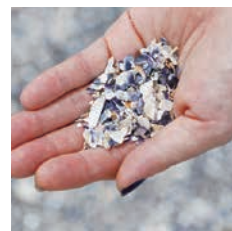
(19歳 大学一年生 女性) 新しい友人とふたりで

のんびりと言うか、三步進んで二歩下がるような歩みは、友人が何かにつれシャッターを押しているから。道の脇には、スマレ、ハマダイコン、ラップスイセン、名前も知らないいろんな自生の花が咲いている。そうか、この風景、カメラ好きにはたまらないんだな。いいや、べつに急ぐ行程でもないし。

樹々のトンネルを抜けると「佐久島の秘密基地／アポロ」、海岸の道とハイキングロードが出会う広場にある「北のリボン」という名の赤茶色の展望台。アートなんだか、自然の景色なんだか。ああ、そうか。そのどちらもなんだ。わたしたち、アートめぐりをしてるようで、佐久島の自然という大きな大きな手のひらの上でたわむれているんだ。

陽が落ちはじめた新谷海岸。紫色の砂に触れてみた。ほんとうに紫だ。外国の船舶にくっついてきたムール貝の貝殻が砕け、この浜に辿り着いて、この不思議な色調をつくりあげるのだという。ロマンチックだね。

次第に広がる夜の闇、真っ黒の海。灯りもなく、波の音だけが静かに響く。自分と自然以外、何もないこの不思議。どこからか充ちてくるなんとも言いがたい感動。船の時間だ。きつとまた佐久島に来るんだろうな。





日間賀島



ワンダーなおもてなしで、絆を。

夏のタコ、冬のフグが名物の日間賀島は、水産業と観光業、島民みな支え合う活気溢れる島です。ようこそ日間賀島へ。おいしい魚いっぱい食べてね。家族みんな楽しんで。いい思い出づくりできたかな。そんな目配りと心配りのおもてなしが信条です。家族や仲間と、一緒に感動を味わえば、絆は深まる。そんなかけがえのない、ひとときをお手伝いしたいから、次はどんなワンダー!なおもてなしをしようか?といつも考えています。できれば、また逢いたいと感じていただけるように。



旨い、楽しい、美しい。 一緒に驚くと、絆ができる。

TOKYOでもKYOTOでもなく、HIMAKAに来たのは物好きって？いや、SNSで知り、訪れた日間賀島は、COOL JAPAN そのものだ。何が素晴らしいって、都会とは違うハートウォームなおもてなし。これは世界中の旅人に拡散すべきだろう。日間賀島は、大型の観光施設や高級な食べものだけを売りにしているわけではない。むしろ、気の置けない親しみやすさだろう。

私たちが港に着くと、初老の女性が「うえるかむ！」と手招きをした。ライトバンに乗り、曲がりくねった坂道を5分ばかり走ると、宿に到着だ。長靴姿で掃除中の若い女性、そしてそのお子さんたちだろうか、皆が笑顔で迎えてくれた。

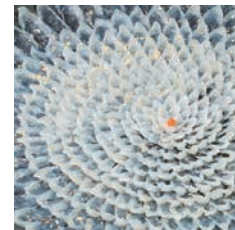
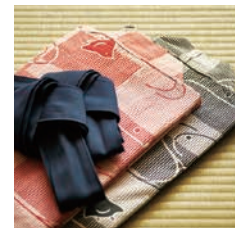
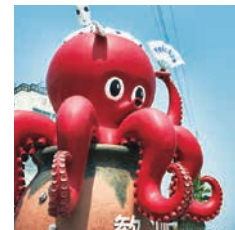
この宿、いやこの島の人、おしなべてフレンドリーだ。たとえ英語があまり通じなくても、身振り手振りでなんとかしようコミュニケーションしてくれる。夕食の前に風呂はどうかと声を掛けてくれたのは、着物姿の女性。よくよく見ると、玄関で長靴姿で迎えてくれた娘さんではないか。彼女は、この宿の若女将なんだそうだ。185センチのボクにも寸足らずにならない大きなサイズの浴衣を用意してくれ、ジャパニーズ・バスの入り方をつたない英語だけど一生懸命教えてくれる。

(36歳 タイ在住 男性) クールならぬウォームジャパンの旅

ディナーは驚いた。お皿に丸ごと茹でたてアツアツの蛸がドン!と。これをなんと、ハサミでチョコキチョコキ切って食べるのだという。恐る恐る口にすると、デリシャス!やわらかいだけでなく適度な弾力があり、噛むほどに、海の味の奥にあま味がある。さらに大きなお皿が運ばれてきた。「ディス・イズ・フグ」と女性が解説してくれる。薄い切り身でつくられた美しい花の下に、皿の絵柄が透けて見える。何という歯ごたえ!これが有名な日間賀島の河豚か。FUGU-ARTだ。これには、仲間一同、感動。フォトを撮りあい、SNSにアップする。

「おひとつ、どうぞ」とSAKEをすすめてくれる仲居さんが、あたたかなおもてなしで仲間との場を盛り上げ、笑いの絶えない楽しいひとときをつくってくれる。一口で飲み終えてしまう小さな杯は、くりかえし酌み交わすことで人間関係を強固にし、絆を育むものだとも教えてくれた。実に、クールだ。お・も・て・な・しの原点は、人への気配りなのだろう。

ニッポンを存分に満喫することのできた日間賀島の旅。それは、思いやりと親切心に溢れていた。ボクは祖国の友に奨めるだろう。I recommend HIMAKA. (ボクのお奨めは日間賀島さ)と。



ひまか・わんだーらんど。

ここで見る子供たちの成長は、眩しい。

(37歳 京都府在住 男性)
家族のびのび成長の旅

家族揃っての二度目の日間賀島旅行。「また、日間賀島に行こうか」という子供たちへの提案は、「いく!いく!」と二つ返事がかえてきた。思いおせば、去年の夏休み、初めて誘ったときは、「そこって、おもしろいゲームあるの?」と不満げだった。海を見たことのないふたりの息子に、海を、そして自然に触れることを体験させたい。そんな親の勝手な想いは、通じることはなく、がっかりしたものだ。

携帯ゲームを手放さなかった彼らが、スコップを手にし、砂浜を掘っている。箱めがねで海の中を覗くことに夢中だ。生きものを発見しては、目を丸くしている。そんな姿に、なんだかほっとする。「ゲームより楽しいだろ」って言いたくなる。

目の前の磯で遊んでいた上の子が、何かを手にして嬉しそうに戻ってきた。蟹だ。地元日間賀島の子に捕まえ方を教わったらしい。息子は、後ろから近寄ってきた日に焼けた子供を指さして、「タコもいたんだよ。」と興奮している。ここで仲良くなったらしい少年は、蛸を持っていた。お礼を言うと、恥ずかしそうに、「また遊びにきてください」という。

そういえば、船を降りて宿まで歩む間も、海水浴場でも、漁港でも、地元の人がみんな笑顔で、大きな声で挨拶してくれた。

よそから来た者であることは、一目瞭然なのに。島民みんなが歓迎してくれている。ほんとうにアットホームな島だ。

今回の旅行のテーマは、冒険。遊園地のようなアトラクションに乗るようなものではなく、自然と遊ぶ面白さを自分で発見して欲しいと思ったからだ。もうふたりとも小学生だし、自転車も乗れる。もちろん、無茶をすれば、けがをする怖さもあるが、彼らの自主性を尊重して島を楽しむことにしたのだ。

海に向かって漕ぎ出すハイジのブランコで、叫声をあげた。こわごわ触っていたイルカともだんだん仲良くなった。自分たちで捕った魚介でバーベキューをした。

自然と向き合って遊ぶ。小さな冒険は、たまに失敗もするけど、うまくいったときの感動は、ものすごく大きいようだ。女房は、ビーチマッサージや海の幸に大満足のご様子(なぜか敬語)だし、僕は、そんな彼らの成長を目の当たりにすることがうれしいし、なによりそれをつまみにおいしいお酒が飲める。

ここ日間賀島は、僕ら家族みんなのワンダーランドだ。wonder! は与えられるものではなくて、見つけるものなんだ。そんなうれしさに気づかせてくれた〈ひまか・わんだーらんど〉。島の皆さま、ありがと〜。



篠島



浪漫チック、満ちる島へ。

小島が点在する風光明媚な景観の篠島は、豊かな漁場に恵まれ、漁業が古くから盛ん。一年中、旬の魚に事欠かないほど、魚種が豊富です。伊勢国と東国を結ぶ海上交通の要であったことから、歴史的な逸話や史跡がたくさんあります。伊勢神宮に神饌として奉納されるおんべ鯛、島内にある神明神社と八王子社は、伊勢神宮の式年遷宮で役割を終えた古材で遷宮を行うなど、特別な関係を千二百年紡いでいます。類い希な景観、歴史文化。悠久のロマンを感じてください。



千二百年の歴史が息づく、 風光明媚な島。

篠島は、二度目である。先回は、会社の同僚らとの宴会旅行だったが、その時に味わった海の幸の味を家内にも味あわせてあげたい、そして実は、われわれの結婚記念日のお祝いにもしたい、との目論見だった。

知多半島の先に浮かぶ篠島は、三河湾と伊勢湾の海流が混じり合う場所であって、海の恵みが豊か。四季折々の旬の魚介類が楽しめる。河豚くらいしか印象になかった篠島だったが、お世話になったお宿のご主人から、旬のお魚のことをいろいろ教わった。過剰に手をかけないシンプルな料理は、素材を知り、その旨さを引き出す、漁師の食べ方だった。そんな感動を家内に話した時に「おいしい土産話はいらない」と揶揄されたこともあっての、今回の旅となった。

今年は、20年に一度の遷宮の年。伊勢神宮の式年遷宮の翌々年、下賜された古材を用いて神明神社と八王子社の社殿を新たにするという行事がある。また毎年3回、おんべ鯛と呼ばれる干鯛が奉納されるなど、伊勢神宮との関係は、千二百年も続く深いものらしい。その歴史が味わえる、遷座祭とおんべ鯛奉納祭が執り行われる10月に篠島を訪れた。

20年を経たものとは思えない目映い木肌と檜が香り立つ神明

(57歳 三重県在住 男性) 夫婦感動の旅

神社の社殿に「神々しいとはこういうことね」と家内。と、浜の方から、太鼓や鈴の音と男たちのかけ声が聞こえてくる。足早に向かうと、大勢の男たちが揃って踊っている。「いいわね、こうやって一体感のあるお祭りって」と家内は、感動をもらす。確かにわれわれの住む街では、もう見られない風景かも知れない。漁師の町だからこそか。

ひとしきり祭りを見た後、島内を巡る。名古屋城築城のため岩の切り出しに来島した加藤清正が運び残した巨岩、清正の枕石。そして、かつては鯨が陸揚げされていた、鯨浜。こんなに小さな島なのに、こんなに近くにある島なのに、魅惑的な歴史が詰まっていることを知らなかったなんて。

夕方、日本の夕陽百選に選ばれているという万葉の丘の展望台へ登った。西の海に陽が沈むのを待っていると海に浮かぶ松島が影絵のようになった。ロマンチックな風景に、ふたりでいると少し照れくさい。

おいしいお魚を食べようと夫婦ふたりで訪れた篠島は、歴史・文化にもたいそう味のある島だった。もちろん、三河湾の幸はおいしかったことはいうまでもない。旅館のご主人が朝食に出してくれた、鯛茶漬は絶品でした。また、来ます。



漁師の島は、 海の恵みに感謝する島でした。

(43歳 東京都在住 男性) 海の幸の旅

突然騒がしくなった海鳥の鳴き声方に目をやると、漁船が海鳥を引き連れて漁港に入ろうとしている。しらす漁の船だ。日に焼けた漁師たちが、手際よく、山盛りになったケースを陸にあげている。キラキラと輝くしらすは宝石のよう。魚市場に行くと活気ある声が響き渡る。かけ声の主は値札が次々と渡され、もっとも高値を示した仲買人の札だろうか、それが水槽に投げ込まれ、あっという間に競り落とされていく。水槽のなかをのぞきこむと、丸々としたトラフグがゆうゆうと泳いでいた。あ、立派な鯛もいる。

篠島は、知多半島と渥美半島の間にはさまれた三河湾に浮かぶ小さな島。大きな河川からの栄養と外海からの潮、そして花崗岩から成る岩礁が、豊かな漁場を育み、たくさんの海の幸に出会える島だ。しらす、鯛、タコ、伊勢海老、ワタリガニはもちろん、穴子、ハモ、アオリイカ、車海老、アワビ、サザエ、本ミル貝、アカニシ貝、カキ、平貝など高級料亭などでしか使わないようなものも獲れる。内海ならでは、サバ、メバル、アイナメ、アジ、ハマチ、スズキ、クロダイ、アカダイ、シマダイ・・・その魚種の豊富さに驚くだろう。篠島は、魚好きの私には、たまらない島だ。

魚には、旬がある。新鮮なものが美味しいのは間違いないが、

加えて旬であることが重要だ。その驚きを教えてくれたのは、この旅館の主だ。篠島は、漁師の島である。魚を知る人たちの食べ方が一番美味しいことは疑う余地がない。

今回の旅の目当ては、日本一の漁獲高で知られるしらす。秋は、水温が下がって身の締まりが良くなるということ、揚がったその日だから食べられる生しらすのことを聞かされたからだ。今回は、旅館の主と連絡を取り、漁の日を尋ね、計画した。海も荒れず、船が戻ってきたその風景に、「やった!」と拳を握ったのは、僕だけかも知れないな。

生しらすは、想像を越えた旨さ。加えて出された焼き魚は、夏の代表的な白身魚のスズキ。旬を過ぎてない? 「秋から初冬にかけて、産卵のために来る子持ちのスズキも、脂がのっておいしいよ。実は夏より美味しいかも。」と主。いやいや、漁師の島にはかなわない。これからは、宿の予約の時に、何が獲れているのかを聞いて、その上でリクエストしよう。あらかじめ決まった料理をいただくのではなく、海の様子、漁の加減で、その時いちばんのものをいただく。もちろん、海の恵みをおいしくいただける、漁師の食べ方で。



〈あいちの離島ビジョン〉

うれしいニッポンを育みつづける、あいちの離島へ。

〈佐久島〉

自然と人間のいい関係へ。

〈日間賀島〉

ワンダーなおもてなしで、絆を。

〈篠島〉

浪漫チック、満ちる島へ。

■ビジョン策定メンバー

◎佐久島

鈴木喜代司
大島眞信
鈴木章伸
加藤麻紀
神谷芝保
吉永 仁

◎日間賀島

鈴木甚八 鈴木貴博
鈴木浩二 鈴木克明
鈴木健司 鈴木幸彦
鈴木俊幸 宮地由也
大西誉悠貴
宮地 達

◎篠島

河口 修 板谷 豊
中村智貴 竹中豊生
新美俊洋
辻 佳佑
天野斗人
鈴木 秀

◎名古屋わかもの会議

水野翔太 西脇高天
中村鈴菜 森本珠莉
稲熊 亮 吉川ひなの
青木祐里香 犬飼悠介
石黒奈保子 仲井達哉
田中梨央

◎地域ブランドプロデューサー

川合靖之

◎西尾市地域振興部佐久島振興課

◎南知多町企画部地域振興課

◎愛知県振興部地域政策課

ビジョンを見つめれば、何をすべきか見えてくる。

今回、あいちの離島〈佐久島・日間賀島・篠島〉が揃って、ブランドを育てていくためのプロジェクトをスタートしました。ブランドとは、人の頭の中に刻み込まれる好ましいイメージです。名前はもちろんのこと、格別の存在感があり、なくなったら寂しいと思わせるものです。簡単に言えば、「魅力ある個性＝らしさ」でしょうか。それは、お見えになるお客さまには、独特のうれしさを感じさせるものであり、お迎えする島の人々には、少しばかりの誇らしさを感じさせるものです。

今回の平成27年度プロジェクトでは、そのブランドの目指すものを見いだすために、3島それぞれが持っている資産を洗い出し、自分たちがどんな魅力を持っているのか再確認し、そして、そんな魅力を持つ我々だからこそ目指したい、それぞれの島のありたい姿＝ビジョンを描きました。

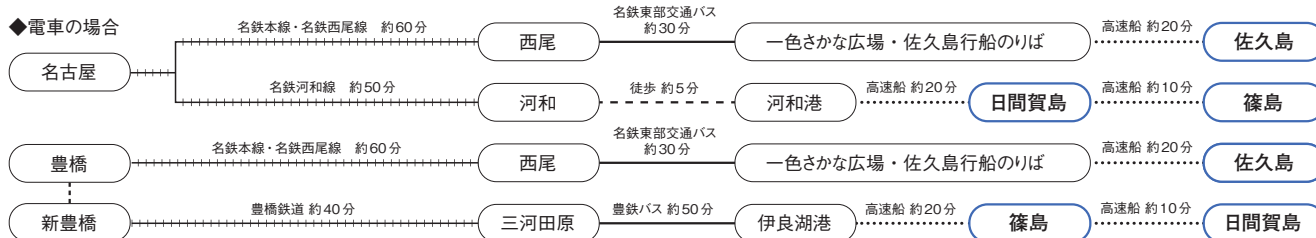
このビジョンブックには、そんな3島が集まり熱く意見を交わしたワークショップでの想いをまとめています。ぜひここで描かれているそれぞれの島のビジョンを多くの関係者とわかちあっていきたいと思います。

そして、これからが本番です。このビジョンを実現していくためにいかに動くか。具体的なアクションこそが重要です。その一貫したいくつかのアクションの積み重ねが、「佐久島らしさ」+「日間賀島らしさ」+「篠島らしさ」＝あいちの離島ブランドを築いていきます。



■佐久島・日間賀島・篠島の主なアクセス方法

◆電車の場合



名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
愛知県振興部地域政策課 052-954-6096

